あれから五年の月日が経ちました。よしおは、小学校の六年生になっていました。といっても、このお話は、今からもう四十五年も昔のお話なのです。

よしおが通っていた学校は、毎朝、集団登校をしていました。集団登校とは、近所の子どもたちが集まって、班を作って、みんなでいっしょに学校に行くことです。

五年前、一番小さかったよしおも、今では、体も大きくなり、

「全員、そろったか？さあ、出発するぞ！遅れずについて来いよ！」

なんて、班長さんが持つ旗を振り回しながら、えらそうな態度をとっています。今日は、特に、いばっているようです。それは、この登校班に、新しい友達が二人も入ってきたからです。

さとると、まみという兄妹が、東京から、よしおの家の近所に引っ越してきたのです。

さとると、まみは、よしおのいとこです。二人の下には、幼稚園に通っている、きみちゃんという可愛い妹もいました。

さとるたちが、東京から田舎に引っ越してきたのには、わけがあったのです。

さとるのお父さんは、東京の大きな会社で働いていました。よしおも、お盆やお正月に帰省してきたさとるの家族といっしょにご飯を食べたり、遊びに行ったりしていました。さとるのお父さんは、いかにも都会の会社員という感じで、かっこよくて優しくて、

「さとる。よしお君は一つお兄さんなんだから、いろいろな事を教えてもらいなさい。

よしお君、たのんだよ。」

なんて言うものですから、よしおは、さとるのお父さんのことが大好きでした。

ところが、さとるのお父さんは、東京で重い病気になってしまいました。さとるのお母さんは、小さな三人の子どもをアパートに残し、病院へ看病に行ったそうです。幼い子どもたちのことを心配しながらも、面会時間が終わっても、どうしても病室を離れることができず、ベッドの下にかくれて、見回りの看護師さんが部屋を出て行くのを待ったこともあったそうです。そのかいもなく、さとるのお父さんは、三十五歳という若さで、この世を去ってしまったのです。

さとるのお母さんは、幼い三人の子どもを連れて、実家であるよしおのおじいさんの家に戻ってきました。よしおも、その日、すぐ近所のおじいさんの家にいました。

「お父さん。お世話になりました、幸せになりますと言って、この家を飛び出して行ったのに、帰ってきてしまいました。本当に、すみません。」と、おばさんは、さとるとまみときみちゃんを、横に、ちゃんと座らせて、深々と頭を下げました。

明治生まれの瓦職人のおじいさんも、娘と孫の正面にきちんと正座しなおして、

「おまえたちの家じゃ。何の遠慮もせんでいい。おまえたちの家じゃ。」と、一言だけ、天井を見上げながら言いました。

それを、よしおは、となりの部屋からずっと見ていたのです。

運動会も近づいたある秋の日の夕方。

おばさんが、真っ黒い顔を手拭いでふきながら、よしおの家にやってきました。あの日から、おばさんは、おじいさんの瓦工場の仕事を手伝っていました。

「よしお君。今日は、お願いがあってきたの。もうすぐ運動会でしょ？きみ子の親子競技に、よしお君、出てくれないかな？」

「おばさんは、出られないの？」

「今年の親子競技は、子どもを肩車して走る競技なのよ。おばさん、自信ないなあ。それに、他の家は、みんなお父さんが出るそうなの。」

「わかった。いいよ。任せといて！」

「ありがとう。助かったわ。ゆっくりでいいからね、無理しないでね。」

と、いうことでよしおは、きみちゃんの親子競技に出場することになったのです。よしおの町では、小学校と幼稚園が合同で運動会をしていました。

青くすみわたった空に、さわやかな風が、さあっと吹き抜けていきました。

よしおは、幼稚園の親子競技の集合場所に、きみちゃんの手を握りしめて立っていました。いくら体が大きくなったとはいえ、まだ小学生のよしおは、大きなお父さんたちの間では自立たないはずなのです。でも、一人だけ、体操服姿のよしおは、応援用のテントの中からでも、すぐに見つけることができました。

「小学生のお父さんも出場するみたいですよ。小学生のお父さん、がんばってください。」

と、アナウンスが流れました。それと同時に、クラスの友達たちのとても大きな声援も聞こえてきました。

よしおは、軽々ときみちゃんを肩車して、その場で、駈け足のかっこうをして言いました。

「きみ子、しっかりつかまっておけよ。最初からダッシュするからな。」

きみちゃんは、肩の上からキャーキャー言って、よしおの頭をポンポンとたたきました。

よしおたちの順番です。大きなお父さんたち五、六人の中に、少しへこんだきみちゃんの黄色い帽子が見えます。

パーン。

ピストルが鳴りました。よしおは、きみちゃんの足をしっかりつかんで、最初から猛ダッシュをしました。

幼稚園の親子競技は、親子のふれあいをすることが目的なので、最初から全力で走るよしおは、他のお父さんたちを大きく引き離してしまいました。それを見た、少し勝気なお父さんが、急にスピードを上げて追いかけましたが、よしおもスピードをますます上げていきますので、とても追いつくことはできません。

よしおときみちゃんは、他のお父さんたちを大きくリードしたまま、一番でゴールしました。

会場中から、割れんばかりの拍手がわき起こりました。

よしおが、ハアハアと肩で息をする度に、肩の上のきみちゃんの体が上下して、まるで、きみちゃんを小さく胴上げしているかのように見えました。

よしおは、何としても、何が何でも、きみちゃんを一番でゴールさせたかったのです。

あれから四十五年。さとるとまみは、お医者様になっていました。

そして、きみちゃんは？

きみちゃんは、大きな小学校の教頭先生をしています。

よしおは、どうなったのでしょうか。

よしおも、先生になりました。

今は、小学校の校長先生をしています。

小学校の子どもたちに、自分が小学生の時に体験したことを、絵本にして伝えているようですよ。

おしまい